[追悼]

ニコラス・ジョン・ハブラーケン先生の思い出

南 一誠 | 芝浦工業大学 名誉教授

ニコラス・ジョン・ハブラーケン、マサチューセッツ工科大学（MIT）名誉教授が2023年10月21日、オランダ、アペルドールンのご自宅近くの高齢者施設で逝去された。MITを退職され母国オランダに戻られてからも、講演や執筆など元気に活躍されていたが、半年ほど前から体調を崩されていた。95歳の誕生日を迎えられる直前のことであった。

告別式は2023年10月28日、アペルドールン郊外の葬祭場で執り行われ、インターネットでも配信された。ご長女のジュリーさんは、ギリシャの詩人カヴァフィスの詩「Ithaca」を読み、式を締めくくった。高い志を持って目的地に向かう長い旅路を詠ったこの詩は、信念を持って都市、建築の真実を生涯、探究した教授にふさわしいものであった。告別式に参集した一人ひとりが教授に別れの挨拶をする際、会場にはグレン・ミラーのムーンライト・セレナーデが流されたが、ジャズのような統一感とヴァリエーションを持った都市建築をめざして研究活動をされた教授に相応しい選曲だったと思う。

写真1　ニコラス・ジョン・ハブラーケン先生。告別式の後、ご家族から送られてきた御礼状にて紹介された先生のお写真。下記の教授の信条のお言葉が添えられていた。
Study the field as a living organism
It has no form, but it has a structure
Find its structure and form will come

写真2　お亡くなりになる直前のハブラーケン氏（左）。奥様マーリーンさん（右）、長女ジュリーさん（中央）と。

論文集

The Short Works of John Habraken：Ways of Seeing / Ways of Doing

教授は1928年10月29日、インドネシア・バンドン生まれであり、幼少期はインドネシアで過ごされた。学校が休みの時にはカンポンを歩き回り、そこでの生活がとても秩序立ったものであることを発見されたという。カンポンでの原体験は、世界各地の集落を観察し、その中に都市や建築の本質を見出された研究者としての視点を形成することに繋がったと思う。教授の蔵書の整理をされたジュリーさんによると、ギリシャ、ローマなどの歴史的建築や日本、中国、南米の都市や建築に関する書籍が数多く含まれていたとのことである。

大学進学にあたりオランダに帰国され、48年から55年までデルフト工科大学で建築を学ばれた。建築史の講義を熱心に聴講されたという。マリヌス・ヤン・グランプレ・モリエール教授が引率されたイタリア各地を巡る視察旅行を学生代表として運営されたが、その頃から都市を形成する構造（Urban Fabric、Field）に関心を持っていたと述べておられる。学生の時から画一的なマスハウジングに違和感を持ち、居住者は住宅の計画プロセスに参加すべきで、そのことが建築や居住環境を豊かなものにすると考えておられた。

65年から75年まで民間の建築研究所SAR（Stitching Architecten Research）の初代所長として、adaptableな住宅の設計手法など、都市・建築の研究に携わることになる。67年、アイントホーヘン工科大学に創設された建築学部の初代学部長に就任。1975年から1989年までマサチューセッツ工科大学の教授として（1981年までは Head of Architecture Departmentとして）、都市と建築の設計理論と設計手法の研究に注力され、多様性や経時変化に着目した Thematic Designの講義と演習などを担当された。MIT在職時に講義され、研究されたことは、The Structure of the Ordinary

(1998)やPalladio's Children (2005)に詳しい。演習科目については、当時MITの学生だったAndrés Mignucci教授やJonathan Teicher氏が協力して、Conversations With Form: A Workbook for Students of Architecture (2014)として出版されている。教授は生涯にわたり、数多くの論文を発表されているが、The Short Works of John Habraken: Ways of Seeing / Ways of Doing (2023, Routledge)は、それらをテーマ別、年代別に整理したものである。副題が示すように、都市や建築を観察することと、観察して発見したことを実践することという視点でまとめられている。MITで教授の指導を受け、その後も教授とともに研究活動を行ってきたStephen H. Kendall教授や建築家のJohn R. Dale氏が編集を担当し、要所要所に教授へのインタビューを配置した内容である。

記録と実践

Open Building for Architects, Professional Knowledge for an Architecture of Everyday Environment

1961年、教授はその後の理論の原点となった「サポート、マスハウジングに替わるもの」を上梓し、住宅生産の主体は居住者であると主張、住宅の設計・建設におけるサポート(スケルトン)とインフィルの分離について考察し、住宅産業の未来についても提言した。この考え方はオープンビルディングと呼ばれるようになり、CIB(建築研究国際協議会)にワーキング・コミッションW104 Open Building Implementation(オープンビルディングの推進)が設置され、この四半世紀、国際的な広がりをもって研究と社会実装が進められてきた。オランダの建築家フランス・ファン・デル・ヴェルフさん、フィンランドの建築家ピア・イロネンさんなど、世界各地にオープンビルディングの考え方に基づき集合住宅などを設計した建築家がいる。教授の死後に出版されることになったOpen Building for Architects(2023, Routledge)は、教授の最晩年にKendall教授がインターネットを使ってオンライン会議を繰り返してまとめた書籍である。世界各地で実現したプロジェクトを紹介し、建築家がオープンビルディングの考え方を実践するために有用となる具体的な手法を解説している。住宅インフィル産業の発展、建築教育の再活性化についても考察している。日本からは大阪ガスの実験住宅NEXT21について詳しく記述されており、建築家の近角真一氏のコメントも紹介されている。

ハブラーケン教授は、亡くなられた内田祥哉東京大学名誉教授や巽和夫京都大学名誉教授などの大学関係者や建築家と長く、親しく交流された。その理論はKEP(Kodan/Kikou Experimental housing Project)、CHS(センチュリーハウジングシステム)、KSI(公団型/機構型スケルトン・インフィル)など、我が国の住宅生産に大きな影響を与えてきた。「長期優良住宅の普及の促進に関する法律」の可変性の考え方もその一つだと思うが、教授はこの法律を時間の観念を取り入れた住宅に関する世界初の法令だと高く評価されていた。

ハブラーケン教授が書き残された数多くの著者や論文を通して、これからもその考えの本質的な意義を考え続けることにしたい。

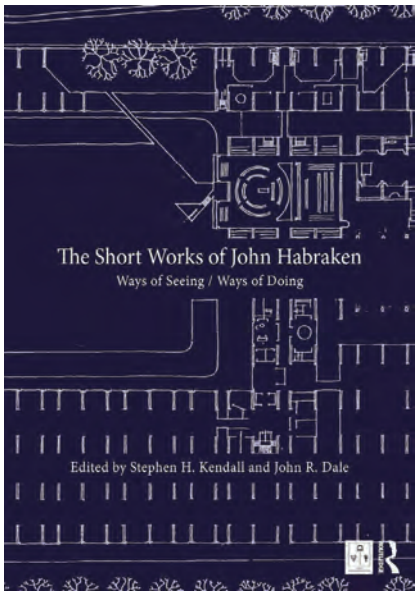

図1 The Short Works of John Habraken: Ways of Seeing / Ways of Doing

図2 Open Building for Architects, Professional Knowledge for an Architecture of Everyday Environment

註　ハブラーケン教授の略歴、受賞歴、主な著書などについては、拙稿「追悼――ニコラス・ジョン・ハブラーケン先生を偲んで」(『建築雑誌』2023年12月号、p.69)をご覧ください。教授のホームページに詳しい情報があります。
https://www.habraken.com/